桜と撫子と吸血鬼と十字架と

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜と撫子と吸血鬼と十字架と

【Ｎコード】
Ｎ７０９５Ａ

【作者名】
滾

【あらすじ】
桜と撫子は仲の良い親友同士。ある帰り道、いつもと同じように帰路についた二人はウワサ話を始めた。しかしそのウワサ話は事の始まりに過ぎなかった。

序章〜始まりの噂〜

日が暮れている。
山に半分隠れた太陽が、最後の足掻きに、と照らす光は淡い色となって町を色づけていた。
その中を二人の女学生が、カバンを手に帰路についている。
桜と撫子。
これが二人の名前である。

「ねぇ」
と、桜が撫子に顔を覗かせる。
構わず、撫子は歩みを続ける。
別に怒ってる訳でも無かったが、ただ膨れる桜の顔が見たかったから撫子は黙って歩みを続けた。
「ねぇ、ってばぁ！」
とことこ横を歩きながら、桜は困ったような、少し膨れたような、そんな顔をする。
撫子はその可愛らしさに耐えかね、
「何？」
とニッコリ答えた。
同時に、桜の顔が緩む。
「あのね、あのね！」
今にも跳ねだしそうな口調で、桜は言う。
「知ってる？」と。
限りなく笑顔の桜を見、こちらもそれに勝る勢いの笑顔で、
「何を？」
撫子は答えた。
「噂だよ！」
「ウワサ？」

うん！と、答えると、桜はカバンを持って手を空に伸ばし、「がぉー！」と言った。
ああ、可愛いなあ・・・。と思いながら、
「それ、何？」
桜のポージングの意図がわからず、撫子は首をかしげた。
可愛らしさは百点満点だが、表現力に関してはノーコメント。
それでもめげず、桜は笑顔で言うのだ。
「吸血鬼！」と。
はて、吸血鬼の鳴き声は「がぉー」で正解なのかしら？と撫子は思った。が、そんな事をいって桜の機嫌を損ねるのは嫌なので、撫子は笑って「へぇ」とだけ言った。
「あれだよ？血ぃ吸うヤツ！」
「うん。解ってるよ。それが？」
「最近ね、吸血鬼がここら辺に出るんだって！」
んなアホな・・・。と撫子は思った。が、勿論そんな事は言わずに、
「ほぅ」とだけ言った。
「それでね、最近欠席の人が多いのは、吸血鬼に血を吸われちゃったからなんだって！」
欠席はインフルエンザがどうのって聞いたけど・・・。と撫子は思った。が、当然そんなことは言わず、「あら」とだけ言った。
次いで、聞く。
「じゃあ、今欠席してる人ってのは、死んじゃってるって事？」と。
しかし桜は首を横に振り、
「ううん。死なないよ」と言った。
死なないよ、って、決定権はあなたに無い気がします。と撫子は思（略）。
「どういうこと？」
撫子は首をかしげる。
と、桜は「ん～とね」と思い出すような素振りを見せて話す。
「まず大元に“本物の吸血鬼（ｇｅｎｕｉｎｅ　ｖａｍｐｉｒｅ）

”がいるんだけど、その吸血鬼に血を吸われちゃうと吸われた子も吸血鬼になっちゃうの。そうやって吸血鬼になった元人間を“吸血鬼の使徒（ａｐｏｓｔｌｅ　ｏｆ　ａ　ｖａｍｐｉｒｅ）”っていうんだけど、その”吸血鬼の使徒”に血を吸われた人も、同じように”吸血鬼の使徒”になっちゃうの」

「へぇ・・・」

いやに凝った話だな・・・。

撫子は考えながら歩く。

そろそろ陽が殆ど山に隠れ始めた。

ああ、早く帰らないと暗くなっちゃうな・・・。

「ねぇ、桜。ちょっと急ごう・・・、って、桜？」

撫子は後ろを振り返った。

隣にいると思ってた桜が、立ち止まって撫子のちょっと後ろにいた。

「・・・・・それでね」

と、桜は話を続けようとする。

「桜、そんな噂話はもういいから、早く帰ろう？暗くなっちゃう」

言って、撫子は手招きする。が、桜は動かない。

「桜・・・、どうしたの・・・？」

「・・・それでね、“吸血鬼の使徒”は仲間を増やすとき、全部話さなくちゃいけないんだよ・・・」

「桜、もういい――――」

「聞いてよォッ！！」

撫子が言い終わる前に、桜の叫び声に似た声が遮断した。

「・・・さく、ら・・・？」

日頃大人しい桜からは聞いたことも無いような声に、撫子は恐怖に似た驚きを覚えた。

陽が、落ちる――――

「撫子・・・、ゴメンね・・・」
桜が、吐き出すように言った。
目に涙が浮かんでいるのが、微々たる光で撫子には解った。
それともう一つ、
光っている、何かが見えた。
それは桜の口元。
鋭い何か。
「ゴメンね・・・」
桜は言った。
“吸血鬼の使徒”になった人間はね・・・」と。
「一人の人間を仲間に入れないと・・・、死んじゃうんだよ・・・」
ジジジ・・・ジジ・・・　カンッ
街灯が点いた。
ああ・・・。
撫子は何も出来ない。
ただ、一歩歩み寄った桜を、見てるだけ。
ああ・・・。
と、桜は思う。
そうか・・・。と。

街灯に照らされて見えた、桜の口元の“何か”。
それは異様に伸びた犬歯。
まさしくそれは吸血鬼のそれ。
「ゴメン・・・、撫子・・・」
桜は言った。
大きく開いた口が、撫子に迫ってくる。
肩と首をつかまれて、大きく開かれる。
「ごめんね・・・」
その声は、桜か撫子か、どちらの声か解らない。
ただ、ごめん。と。
首元に桜の歯が当たるのを感じ、
撫子の意識は暗転――――――

序章～始まりの噂～（後書き）

これ続くのか？みたいなノリで終了。
けど一応続くのでどうぞ宜しく。

一章　一話　～部屋と撫子～

「ん・・・、んん・・・？」
撫子は目を開けた。
頭がぼんやりする。
体を起して、頭に手を当てる。

何で眠っていたのだろう？

思い出せずに、撫子は頭を抱えた。
少し記憶が混乱している。
頭がガンガンして、ボヤーっとしている。
「え・・・、っと・・・」
頭を抱え、頭を振って・・・、

「！」

思い出した。

学校からの帰り道。
桜と帰った帰り道。

突然の告白と、意識の暗転。
確か桜が噂話をはじめ、そして自らを”吸血鬼の使徒”だと告白した。
そして撫子の首元に歯を当てて――――

「血を・・・？」

撫子はふと、手を首元に持っていった。
つつ・・・、と首筋を撫でていき、
「痛・・・ッ！」
痛みに顔を歪めた。
・・・間違いじゃなかった。
あれは夢でも何でもない、確かな記憶。
信じたくは、無かったけれども。

それより、と、撫子は周りを見回す。
ここはどこだろう？と。
とりあえず、今撫子が眠っていたのはベッドの上だと言うことが解った。
キングベッド程もある大きなベッドに、撫子一人が眠っていたらしい。
ほかに何か、と周りを見る。
タンス、机。在る物はそれだけで、どうやらここはどこかの部屋の中なのだと解る。
窓はなく、証明の小さい明かりだけで部屋は照らされている。
撫子はベッドから降りると、今度は体を見た。
服に乱れた様子もなく、何をされたわけでもなかった。
「桜は・・・」
と、改めて部屋を見たが、やはり桜の姿は無い。
「・・・そうだ！携帯！」
撫子はポケットに入れておいた携帯電話の存在を思い出した。
ポケットに手を当てると、携帯電話に触れた。
「良かった・・・、在った・・・」
撫子はそれを取り出すと、開いてディスプレイを確認した。が、
「あ、あれ・・・？」
反応はなく、ディスプレイは黒いまま。
どのボタンをカチカチ押しても、ピクリとも反応を示さなかった。

「電話なんて使えないよ」

――――突然の声は後ろから。

「！！？？」

撫子は突然の声に戸惑いながらも後ろを振り返る。

そこには、さっきまでは居なかった“何か”が一人。

ソイツはマントで体を覆いつくし、顔の半分をフードで隠していた。

声からも、男か女かは判別がつかない。

「・・・・・・」

撫子は壁に張り付くように身構えて、ソイツを睨み付ける。

が、ソイツは何をするでもなく、クスクスと声を押し殺すように笑っている。

しかし、それだけのソイツの姿に、撫子は体の震えを覚えた。

何か、得体の知れない何かが、恐怖を感じさせている。

「ふふふ、そんなに怖がらないでよ。別に何をしようってワケじゃないんだから」

口元に手をやって、ソイツは言った。

クスクスクスクス。部屋の中にソイツの静かな笑いだけが残る。

「・・・ここはどこ・・・？・・・あなたは誰？何でここに私を連れてきたの？」

撫子は体の震えを堪えながら、しっかりとソイツを睨み付けて言った。

しかしソイツは何ら変化を見せることも無く、

「そんなまとめて質問されてもね。とりあえず、最初の質問の答えは今知る必要は無いよ」

と言った。

「何故・・・？」

「それもじきに解る。それから、僕が誰かってのもすぐに解る。連れてきた理由も、ね」

そう言うとソイツはクスクス笑って手招きをした。
「答えをくれる所に案内してあげるよ。大丈夫、安心しなよ。さっき言ったように、君に危害を加えることはしない」
「加えること“は”、ね・・・」
「そうさ」
クスクス笑っているソイツに、それでも撫子は何をする事も出来ない。
かと言ってここで燻っているわけにも行かず、
「・・・解ったわ」
撫子は頷いた。
「じゃあ、行こう」
撫子は部屋を出るソイツの後ろについて部屋を出た。

これから先どうなるかを考えたとき、

勿論、良い予感なんてしなかった。

一章　一話　～部屋と撫子～（後書き）

二話目です。
楽しんでいただければ幸い

一章　二話　～部屋の外から～（前書き）

短いです

一章　二話　～部屋の外から～

あの部屋を出、“ソイツ”の後ろを歩き出して間も無く、ソイツはふと足を止めた。
そこには扉があって、おそらく部屋に通じている。
「ここだよ」
と、ソイツは撫子の方を向いて言った。
何がおかしいのか、さっきからずっとクスクス笑ったままだ。
「ここに・・・」
何があるのだろう・・・。
撫子は不安と緊張に駆られながら、

それでも何か、
表現の仕様の無い感覚に苛まれていた。

すると不意に、
ガチャ・・・
と扉が開いた。

「どうぞ」

部屋の中から声がする。
不思議なことに、その声を聞いても撫子には男か女か判断しかねた。
中性的な、と言うわけじゃあない。ちゃんとした、はっきりした声。
それなのに、耳から脳に渡るまでに“そういう判断”が出来なくなる。
解りにくいが、そんな感じ。
さらに言えば、
扉が開いて部屋の中が伺えるようになった。

それでも、撫子には部屋の中が確認できなかった。
いや、見えるのだ。ちゃんと。
中の様子がはっきりと伺える。
しかしそれが、“見える”という状態で止まり、“認識する”まで持っていけない。
だから撫子が部屋から視線を外したとき、撫子は部屋の中の様子を全く覚えていない。
何故なら、最初から認識できてないから。
初めて味わう感覚に混乱しつつも、撫子は“ソイツ”に向けて、どうすればいいのかと視線を向けようとした。
が、
「あ、あれ・・・？」
さっきまで隣に居た“ソイツ”の姿を確認できなかった。
これは認識の問題云々ではなく、事実そこに“ソイツ”は居ない。

「ローゼには席をはずしてもらいました。どうぞ、お入りください」

再び中から声がする。
ローゼ、とはさっき居たやつのことだろう。
「お入りください」と声は言った。
それならば、と、撫子は一歩を踏み出す。
緊張と不安は感じた。が、
不思議と、恐怖だけは感じることは無かった――――――

一章　二話　～部屋の外から～（後書き）

三話目です。
前書きの通り短くなって降りますが、楽しんでいただければ幸いです。

一章　三話　～部屋の中から～

部屋の中は不思議な感じがした。
何が、と言われれば返答に困るが、何か、不思議な感じがしていた。
部屋の中にはタンスや本棚があり、その真ん中に社長室にあるような机があった。
そこに、“誰か”は居た。
例によって、ソレが何かは解らない。目から入る情報が、脳まで届いてない感じ。
“見る”分には何の支障もないが、“視よう”とすると、それは情報として脳に伝わらなかった。
「よく来てくれました」
と、何かは言った。
「そっちが呼び出したんじゃない」
強い口調で撫子はそう言った。
不思議と恐怖はなくなっていた。
「そうでしたね。その通りです」
声は少しほくそえむような感じだ。
「貴女をお呼びしたのは他でもない」
声は言った。
「私の後継者を決めたいのです」と。
「後継者？」
何を言っているのか？
撫子は眉間に皺を寄せた。が、声は淡々と続ける。
「私は世で言う所の吸血鬼、ヴァンパイアです。人の生き血を啜り、何百年も生きる、あの。ですが吸血鬼と言えど、不死身ではないのです。ある程度のダメージを受ければ死ぬこともあるし、下手をすれば病気でさえも私達の脅威と成り得るのです」
語る声に、撫子は何も言わなかった。

何も言わず、ただ聞く。
何かを言っても、どうも意味を成すことは無いだろう。寧ろ反論をすることで殺されるかもしれない。
だから撫子は黙っていた。
これ幸い、と思っているはずもないだろうが、声は続けて言う。
「お友達に聞いたかもしれませんが、私に血を吸われた人間は吸血鬼の力の一端を授かることになります。それは与えた吸血鬼、与えられた人間によって様々ですが、必ず与えられるものです。しかしそんな力の一端では、私の後継者とは成り得ない。ですから、私は考えました。私ももう老い先短い命。後に良き後継者を残すにはどうしたらよいか、と。そこで思いついたのが、この世に多くの“吸血鬼の使徒”を生み出し、その者達で一番優秀な者に私の後継者として迎えよう、と。ですから貴女にもその一員として――――――」

「ッざっけんじゃないわよッ！！」

長々とした声の話を、撫子の怒声が断ち切った。
「・・・何ですか？」
「何ですか、じゃ無いわよ！私達には何の権利もないの！？何でアンタの一存で、納得もしてないことに協力しなくちゃいけないのよ！？アンタの所為で、桜まで巻き込まれて・・・！！」
撫子は目に涙を浮かべたが、それをスグに拭った。
「アンタなんか・・・！アンタなんか・・・ッ！」
もはや声にならず、それを何回も繰り返した。
「はい・・・。それは本当に申し訳ないと思っています。しかし、貴女やお友達が“吸血鬼の使徒”に択ばれたのも、又仕方の無いことなのです」
「何が・・・！！？？」
再び撫子は声を張り上げた。
が、声には届いているのか届いてないのか、声は淡々と続けて言う。

「では聞きますが、貴女は何を日頃食べていますか？牛、豚、鶏、魚。これらを貴女方人間は捕らえて、もしくは飼った上で殺して食すのでしょう？それは違うのですか？彼等に許可を取った上なのですか？会話も間々成らない彼等に、許可を取り、その上で殺して食しているのですか？」
「それは・・・、仕方がないじゃない・・・！そうしないと生きていけないもの・・・！！」
「そうでしょう？その通りです。貴女方は間違っていない」
言って、声は大仰に両手を掲げた。ような雰囲気をかもし出した。
「いいですか？貴女方は彼等よりも強いのです。そして彼等は弱い。強いものが弱いものに許可を取る必要はありません。現に貴女方がそうしているように、それが正しいのです。それを貴女方は人間が人間を殺すのは駄目だ、とか、弱いものを強いものが虐げては駄目だ、などと理解の出来ない事を言っている。おかしな話ではありませんか？」
「・・・・・！」
撫子は何か言おうと口を開いた。が、その口は何も言葉を発しないまま閉ざされた。
言い返す言葉が見当たらなかった。
勿論、全てが全て正しいと思ったわけじゃない。
が、言い返す言葉が無かった。心のどこかで納得してしまった部分が、確かに少しはあったのだろう。
「いいですか？」
声は言った。
「もうあなた方には択ぶ道はありません。あなた方の中から必ず私の後継者となる方を決めていただきます。断ればどうなるか・・・、解りますね？」
殺す、と言いたいのだろう。
「・・・どうしたらいいの？」
「単純な事です。この辺り一辺に“吸血鬼の使徒”を数十人程を配

置してあります。彼等と殺り合って貰いたいのです。それを拒むことは出来ません。すでに貴女以外の全員には説明済みです。全員快く受け入れてくださいました。中には礼まで言ってくれる人も居ましたよ」
「・・・なんで、私が最後なの？」
「何故・・・？たまたまです。最初があれば最後もある。そうでしょう？特別な意味はありませんよ」
「そう・・・」
「さて、もう用はありません。恐らく次目覚めたとき、貴女は自分の本来の居場所にいるでしょう。しかし、これは夢ではありません。それを十分に理解した上で行動してください」
声は言った。
瞬間、撫子の目がかすむ。
「ん・・・？何・・・」
目元を押さえながら、撫子は倒れないように足に力を入れた。
そして、ふと、頭によぎった存在。
「桜・・・、そうよ！桜は！？桜はどうなって――――」
そこまで叫んで、撫子は床に倒れこんだ。
「頑張ってください」
最後に、遠くでそう聞こえた。
そして次の瞬間には、撫子の意識は暗転――――――

二章　一話　～違和感～

気付くと自分の部屋に居た。
ベッドの上で、制服のまま横になっていた。
机、本棚、クローゼット。
ちゃんと鞄もある。
間違いなく、自分の部屋だった。
何だったんだろう・・・？
さっきまでの“何か”。不思議な感覚がまだ残っている。
不思議、と、いうか、何だろう・・・？嫌な・・・、それでも何故か体が軽い。
頭も冴えて、心なしか何時もより周りの風景がクリアに見える。
本当に、何だったろう・・・？
ベッドから降りて服を着替える。
時計を見れば、時計の針は七時を回って半を過ぎている。
いつ帰ってきたのだろう？と思う。
全然、家に帰ってきた記憶が無い。
記憶と言えば、放課後桜と家に帰ろうとして――――
そこまで思い出して、撫子は鞄に手を伸ばした。
鞄の中を探って、携帯電話を取り出す。
勿論、掛ける相手は放課後、撫子が“あの場所”に行くに至った原因であろう人。
撫子は携帯電話のフォルダから『桜』の名前を探す。
探して、表示された電話番号に電話を掛けた。
トゥルルルル　トゥルルルル　トゥルルルル・・・
しばらくコール音が続く。
耳に電話を当てつつ、左手には握り拳を作る。
怒ってる訳じゃなかった。かと言って、大きな声を張り上げない自信も無かった。

ただ、確かなのは、“桜の声が聞きたい”という事。
聞いて、安心したかったのかもしれない。
それに、確かめたくもあった。
さっきまで自分が聞いていたあの話が、本当の事なのか。
今現在、こうして電話をしていても実感が沸かない。全く。
夢だったのかも、とも思う。
思いたい。
だからこそ、桜の声が、話が聞きたかった。
だから、撫子は待った。
桜が電話に出てくれるのを。
だが、
トゥルルルル　トゥル・・・　只今電話に出ることが出来ません
ピー　という発信音の後にメッセージを
切った。
リダイアルで、もう一度掛けてみるが結果は変わらなかった。
居留守を使っているのか、それとも電話に出れない状況にあるのか。
どちらにせよ、今撫子がそれを確かめられることも訳もない。
明日だ。
撫子は携帯電話を閉じた。
桜に何かが起こっていない限り、明日桜は学校に顔を出すはずだ。
撫子はそのままベッドに戻った。
明日。
明日聞こう。
ベッドに横になって、撫子はそう繰り返した。
徐々に眠気が迫ってきたとき、ふと舌が何か鋭いものに当たった気
がしたが、徐々に視界が霞み意識は夢の中に――――

違和感を感じたのは朝目覚めたときだ。
違和感、と言うほどでなにしろ、撫子は異変のようなモノを感じた。

“何”が？と問われるとはっきりとは答えられないが、何かが違った。
その違いに戸惑いながらも、撫子は玄関に向かった。
いつもなら桜が外で待っていてくれているはず。
玄関に手を掛けて、少し息を吸って、開けた。
「・・・居ない」
居なかった。
外にでて左右を確認したが、どこにも桜の姿を見つけることができなかった。
大丈夫。
撫子は学校に足を向けた。
学校に行けば、きっと桜に会える。
いつもの登校風景を一人で歩きながら、撫子は学校へ向かった。
そして撫子が桜の退学を聞いたのは、朝のホームルームでの事だった。

二章　二話　～マラソンと違和感～

「桜が・・・」
退学。
ＨＲ中、担任からの突然の報告に、撫子はうな垂れながらも、その実、さほど驚く事は無かった。
寧ろ、朝から予感している程。
学校にさえ来れば、とは考えていたものの、簡単に会えないとは思っていた。
ただそれは学校を休む、とか、サボる、とかそういう事であって、まさか学校を辞めるとは思ってなかった。
「先生！」
気付くと、撫子は手を上げていた。
「んぉ？なんだ？」
撫子の勢いに押されながら、担任、坂堀　雅夫は撫子を指した。
「桜は、なんで退学を？」
「ああ、何でも、御両親が行方不明という事でな、一時施設に行く事になったそうだ。まぁ、細かいことまでは解らんが」
行方不明・・・。
撫子は心の中で呟いた。
「解りました」
椅子に座り直し、俯き考える。
施設に行った。というのは、多分嘘だろう。
しかし、両親が行方不明と言うのはわからない。
もしソレが本当なら、それは桜が・・・？
そこまで考えて、まさかそんな・・・！と、撫子は頭を振った。
そんな事、桜がするはずない。と。
するはず、ない・・・。
考えながら、何故だろう、断言できない自分を自覚していた。

いや、桜は友達だ。
そして、そんな事をする人間じゃない事は断言できた。
しかし、それはあくまでも“人間”の桜であって、撫子はそれ以外の桜の事を全く知らないのだ。
昨日。あの時、撫子の血を吸う直前。
あの時流していた涙が懺悔の念から来ていたならばまだ信用はできるが、それがどうなのか、もう調べるすべは無い。
どれくらい俯いていたのか、撫子は友人に声を掛けられ、気がつくとＨＲは終わってしまっていた。

桜が居なくなっても、学校の授業はそんな事は関係なしに進んでいく。
一時限目は体育だった。
男子、女子別れての授業で、女子は今マラソンの授業だった。
マラソンと言えば、陸上部で無い限りは誰が嫌う課目である。
その上桜の退学、と言う事実は、確実に撫子だけでなく、クラスの女子全員に衝撃として伝わっていた。
クラスの女子の落胆の顔から、桜がどれだけ大きな存在だったのかを思い知らされる。
小柄で、人懐っこく、全員の妹のような存在であった桜は、やはり誰にも好かれていた。
それは授業担当の教師からも例外ではなく、
「え！？桜ちゃん退学しちゃったの！？」
と、女子の体育担当、明智　明代は顔をゆがめた。
明代は教師の中で、最も桜の事を好いていた人間だ。
その落胆ぶりはクラスメイトを凌ぐ程。
「ああ、嫌だよね。こんな時、授業したくないよね・・・」
言いながら、蹲って地面に“の”の字を指で書いている。
「だけど、私先生だから、授業しなくちゃいけないの。ゴメンね、みんな・・・」

教師らしからぬ発言をしながら、「それじゃあ」と、明代は生徒達を並ばせた。
「これから十分間トラックを走ってね。次の授業でタイム測定だから」
え～、と嫌そうな顔をする生徒達を制して、明代は「ピッ」と笛を鳴らした。

周りの女子達が「え～」と顔を顰めている中、撫子は一人顔をゆがめて立っていた。
それは走るのが嫌だから、では無い事は言うまでも無い。
俯きながら、桜が何故自分の前から消えたのかを考えていると、
「撫子、一緒に走ろう？」
肩を叩かれ、そう友人に言われた。
本当なら、今撫子の肩を叩くのは桜であるはずなのだが。
「うん。一緒に・・・」
笑えていたか解らないが、撫子は頷いた。
桜の事を考えてか、友人も別に何もそれ以上言わなかった。
「ピッ」
と、明代の笛が鳴った。
同時に、一斉に全員が走り出す。
勿論、撫子も。走りながら、考える。
桜は、今なにをしているのだろう？
どこで、一体なにを・・・。
もしかして、本当にあの“声”が言ったように殺し合いをしているのだろうか・・・。
今でも信じられない、あの声の告げた事。
殺し合い。
そんな漠然で、それでいて身近に感じられる言葉。
そんな事を言われて、ただの女子高生になにが出来ると言うのか――

「撫子！」
呼ばれて、撫子はハッ、と振り返った。
するとさっき一緒に走ろう、と言った友人が、少し後ろに居た。
しまった、早すぎたか、と、撫子はスピードを緩めた。全然そんなつもりで走っていたわけではなかったのに。
「ご、ごめん。早かった・・・？」
「早い、とかじゃ、ない、よ・・・。ハァ・・・ハァ・・・。そんなに、飛ばして、だいじょ、ぶ、なの・・・？」
そんなに飛ばして・・・？少し前を走ってしまった位で、と、撫子は首を傾けた。
「いきなり、一周、しちゃうん、だもん・・・。あれ、全力疾走・・・？」
「え？」
一周？
いっしゅう・・・？
撫子は前を見た。
そういえば、さっきここを回った気がする。
けどそんな、全力とかじゃなくて、本当に普通に、寧ろ遅めで走ったつもりだった。
なのに、皆を周回遅れさせてしまった・・・？
後ろを振り返ると、皆が自分を不思議そうな目で見ている。
撫子は朝感じた違和感を思い出した。
そして、ふとある事に気付き、違和感が実感に変わった。
そんな勢いで走っていたのに、息が全く切れていなかった。
何・・・？私の体、どうなってるの・・・？
違和感を再確認した撫子を、遠くで明代が見つめていた。
ニコリ、と、こちらも違和感を含んだ微笑を浮かべて。

二章　二話　～マラソンと違和感～（後書き）

長いです。
女の主人公、と言うのはとても難しいです。今更ながら気付きました。
そんなこんなで、楽しんで頂ければ幸いです。

二章　三話　～生きた死体～

マラソンを終えて、撫子は学校を早退した。
周りの反応は腑に落ちない感じだったが、撫子は一刻も早く学校から出たかった。
「あんなに早く走ってたじゃない」と友人には言われたが、だからこその早退だった。
家路を急ぎながら、さっきの授業を思い返す。
決して早く走ろうとは思っていなかった。が、振り返れば皆を周回遅れにしていた。
自分の身に起きている明らかな“変化”に、撫子は不安を覚えていた。
そしてその不安に拍車をかけるように、もう一つ思う事があった。
昨日から今日の朝に掛けてのあの違和感。
あの違和感が、今となっては逆に殆ど感じなくなってきている。
今までに無かった“何か”が、少しずつ体に馴染んでいく感覚。
その感覚が、撫子に恐怖を与えていた。

自分が自分ではなくなってしまう感覚。

その恐怖に耐えながら撫子は歩く速度を速め、ふと、顔を上げた先、
「・・・！」
見た。
見てしまった。
視線を上げた先。偶然目に入った人影。
細いわき道から身を踊り出し、次の瞬間には向こうに駆け出していってしまった。
左右にちょこんと縛った髪。小柄な背丈。
撫子が見間違うはずが無い。あれは間違いなく桜だった。

「桜ッ！」
撫子は気付くと、鞄を放って駆け出していた。
桜を見失わないように、全力で走る。
通常では考えられないようなスピードで、景色が視界を外れて後ろに流れていく。
それも気にならないくらいに、必死に走った。
桜は足が遅かった。クラスの中でも後ろから数えた方が早いくらいに。
方や、撫子は足が速かった。クラスで一番とは言わないまでも、いつも上位にランクインされる程。
それでも、今見られる二人の速度には差がありすぎた。
撫子が、全く桜に追いつけない。
否（いや）、追いつく、追いつけないの次元ではなく、追いかける事を無謀と見るべき差。
赤子がバイクを追いかけるかのように、桜の姿はすぐに撫子の視界から消えていた。
いや、本当は、追いかけ始めた時からその差は歴然だった。
追いかけ始めたときから桜を見失い始めていた。
それでも撫子は追いかけようとしていた。
何とかして、桜と会話をしたかった。
が、
桜がどちらに走っていったのか、それすらも解らなくなり、撫子はようやく足を止めた。
軽く息が上がる。
あくまでも、軽く息が上がる程度だった。
本気で、必死に走ったのに。
その違和感に歯噛みしながら、撫子は鞄を置いてきてしまったところまで戻った。
歩いて戻り、鞄を見つけたのは十分程たった頃だった。

走ったのはほんの一分程度だ。いや、もしかしたら一分も走ってないかもしれない。
それでも、歩いて戻って十分以上掛かった。
それももう、どうでもいい。
撫子はもはや整った息を悲しみながら、
そういえば・・・。
と、思い出す。
桜が現れた場所。さっきは走って素通りしてしまったが、桜はさっきあそこで何をしていたのだろう？
少し気になり、撫子はその道を少し覗いた。
ひょこ、っと顔を覗かせ、

「きゃぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！！！」

突然の悲鳴。
どこで誰が叫んでいるのか？
撫子は一瞬驚き、そして気付いた。

叫んでいたのは、撫子本人だった。

「ああああああああッ！！」
気付いて尚、叫び続ける。
何故だか、理解するのに時間が掛かった。
恐らく戦慄の顔で叫んでいるのであろう声を上げながら、撫子は改めて視線の先を“認識”しようとした。

そこには、居た。

否、それはもはや“あった”と形容するのが妥当かもしれない。

“恐らく人間であっただろう焼死体”が、道端に転がっていた。

「ああ・・・ッ！！あぁ・・・ッ」

叫びながら、それでも少しずつ驚きを落ち着かせつつ、撫子は何故か“それ”から視線を外さなかった。

外せなかった。

気になったからだ。

目に入るその死体が。

何か、何か気になる。

その“何か”が何なのか解ったとき、

「いやぁああああああああああああああああああああああああッッ！！」

撫子は再び自分の叫び声を聞いた。

“それ”は“死体”では無かった。

まだ生きていた。

真っ黒に焦げながら、生きていた。

生きていると言っても、もはや死を待つばかりといった、“死体”と形容する事に何の差し支えも無い状態である。

それでも死体は生きていた。

残った筋肉でほんの僅かに腕を動かし、痛みか、もしくは恐怖から逃れようと足掻いている。

撫子は胃からこみ上げてくるものを堪え、口を押さえながら、それでも桜を思った。

桜・・・。桜・・・、と。

私達は、今どこに“居る”のか・・・、と。

二章　三話　～生きた死体～（後書き）

どう考えても、僕は小説の更新が遅いと思いました。
どう考えても遅い。今月に入ってようやく一話。
これからもっと頑張らなければな。とそんな風に思いますので、よろしくお願いします。

二章　四話　～“ソイツ”と撫子と男～

撫子は何も出来ずに居た。
生きた死体を目の当たりにして、動けないままだった。
生きた死体はさっきから、口を開けたり閉じたりを繰り返している。
何かを伝えたいのかもしれない。
しかしそれすらも、撫子の目には入ってこなかった。
恐怖で、脳が全く働かない。お化け屋敷に置き去りにされた少女のように、いや、それよりももっと大きな恐怖でもって、撫子はその場に縛られていた。

「情けないね」

声がした。
その声は生きた死体の方から。
見たくなくとも、仕方無しに、そちらを恐る恐る見た。
いつの間にそこに居たのか、そこにはマントを身に纏い、フードで顔半分を覆い隠した“ソイツ”がいた。
あの“部屋”に居た、確かローゼとかいう名前の。
ローゼは僅かに見える口で笑みを作り、生きた死体に向かって歩を進める。
そして、
「こんな程度で驚いてちゃ、先が思いやられるよね」
生きた死体を足で蹴った。
「・・・ッ！」
声にならない声を撫子はもらした。
軽い吐き気すら覚える。
「まぁ、これは僕が処理しておくよ。周りに見られちゃ何かと問題だしね」

ローゼが言って、指を

パチンッ

鳴らす。

と、その瞬間に、

「・・・え・・・ッ」

生きた死体は形を消した。気付いた瞬間に、と言うよりも、本当に瞬きの間に。

撫子は周りを見回してみるが、どこにも生きた死体を見つけることが出来ない。

「大丈夫だよ。ちゃんと“飛ばした”から」

と、ローゼは言った。口元は依然として笑みを浮かべたままだ。

「まあ、気をつけた方がいいね。ここらには性質(たち)の悪い吸血鬼が居るみたいだ。僕より、ね」

言って、ローゼは踵を返した。そのまま何も言わずに歩き始めようとする。

「待って！」

撫子はローゼを呼び止める。

と、ローゼは立ち止まりはしたが、撫子の方を振り返りはしなかった。

「何？」

振り返りはしなかったが、それでもその声はまだ口元に笑みを浮かべていることを想像させるそれだ。

それに安堵したわけでは無いだろうが、撫子は疑問を吐き出した。

「今の、燃えてたのは桜がやったの？何で私の忠告してくれるの？アナタは敵じゃないの？」と。

「・・・君は何でそうも疑問に疑問を重ねるのかな」

ふぅ、と溜息を吐いて、改めてローザは撫子の方に向き直った。

「最初の疑問には答えられないな。口止めされてるからね。で、何

で忠告するの、って話と敵か、って話だけど、僕はあの人に命令されてるんだ。あの人、って解るよね？昨日会ったでしょ？あの人だよ」
あの人。よく解る。昨日、私に“告げた”人。
「命令、って・・・？」
撫子の問い、ローゼはオーバーに肩をすくめて見せた。やれやれ、といった感じに。
「君の味方になれって、ね。僕は嫌だって言ったんだ。面倒だから。でもあの人一度いったら聞かないんだ。解るでしょ、何となく」
あの人の愚痴を首を振りながら話すローゼ。
「それに」と続ける。
「それに、君はあの人のお気に入りみたいだしね」
「・・・私が？何で・・・」
「本当に君は疑問が好きだな。そこまで僕に聞かれても知らないよ。僕はやることやったしね」
そう言うと、再びローゼは踵を返した。
「まぁ、頑張りなよ。っていうか、君が危なくなると僕も面倒なんだから」
じゃあね、と、背を向けたまま手を挙げた。
瞬間、
「え？」
もうローゼの姿は無かった。今度は指をならす事なく。
さっきもそうだったが、何度見てもなれない。一瞬で目の前にあったものが消える。瞬間的に、脳が判断できずにちょっとした混乱が起こってしまう。
いや、そんな事はどうでもいい。
撫子はそのまま佇むわけもいかず、いつの間にか地面に落としていた鞄を拾いなおし、家路に着こうと———
「どうかしました？」

――――していたから、突然の声に思わず飛び上がりそうになった。
多分「ひぃっ！」程度の声は漏れていたかもしれない。
急いで振り返ると、そこには一人の男が立っていた。撫子と同じくらいの歳だと思われる、そんな男。
「大丈夫ですか？何かずっと一人で立ってるのが見えたから・・・」
男はすまなそうに言った。
「あ、いえ、大丈夫です。別に何も・・・」
言いながら、男の脇を抜けてそのまま帰ろうとする。
が、
「待って！」
男が撫子を呼び止めた。瞬間、撫子の心臓が大きく跳ねた。
違う。言えばさっきから心臓は高鳴っていた。ただそれは恋であるとかそんなロマンティックなものから来るものではなかった。
もっと違う。敢えて言えば、恋とは寧ろ真逆のもの。
「君、“そう”だよね・・・？」
男は自分を落ち着けるように、撫子に言った。
男の言った言葉は明らかに何かを伝えるには足らなすぎた。
しかし、今の撫子にはその言葉で全てが伝わった。
「“そう”だよね・・・？」
再び言った男の声は、いやに冷たかった。恐らく、男自身もそれを感じている。
ああ・・・、と、撫子は涙を堪えた。
ああ、と。
逃げようと思えば逃げれるのかもしれない。それでも、撫子には逃げられない理由があった。
この男がさっきの生きた死体の犯人なのか、それを突き止めるため。
桜がやった事ではないと、証明するため。
言うまでも無い。

撫子は男に向き合った。
男は悲しい顔で、それでも撫子を睨み返すのだった。

二章　五話　～滴る火～

撫子は身構えた。
男は少しうろたえる感じで、同じく身構える。
この男(ひと)が、さっきの人を・・・？

考えては見たがそんな事の答えが出るはずも無く、撫子は深く深呼吸をした。
肺が空気を吸い込み、そして吐き出す。
こんな単調な行為が、不思議と気を落ち着かせてくれる。
胸が今までになく高く鳴る。緊張で今にも心臓がはちきれそうだ。
しかし、と、撫子は前を見据えた。

その反面、気分はどんどん高揚していく。

次の瞬間、撫子は持っていた鞄を離した。
そして、

ザシッ

鞄が地面に付くより早く地面を蹴って男の懐まで移動した。
「ぇあッ！？」
うろたえる男を他所に、撫子は自分でも驚くスピードで男の後ろに回りこむ。
同時に、足を引っ掛けて男を仰向けに引き倒した。
思うとおりに体が動く。昨日までは無かった感覚。朝感じた違和感。
そして今、それが快感になりつつある。
「ツッ！」

男は受身も取れぬままに倒れこむ。
その上に、撫子は男の腕を押さえて馬乗りになった。
傍から見れば目を背けたくなる光景ではある。が、そんな事に形振(なりふ)り構っている暇は無い。
「教えて！」
撫子は叫んだ。
「アナタは何を知ってるの！？さっきの・・・」
死体はアナタが――と本当は続けたかったが、それは腹への衝撃でかき消されることになった。
「ぐ・・・っ！」
腹への衝撃で、後ろに吹っ飛ぶ。男が撫子の腹を足で蹴ったためだった。
衝撃で後ろに吹っ飛んで、しりもちをつく。
立ち上がって男の方を見たときには男も立ち上がっていて、更にその手には何かが握られていた。
それは撫子達の日常で見慣れたもの。
それは、
透明な液体の入った『ペットボトル』と、『ライター』、だった。
多分、ペットボトルに入っているのは色とライターの所持からして、油ではないかと思われる。
これでさっきの“生きた死体”を・・・？
身構えつつ、撫子は男に飛び掛る瞬間を見逃すまいとしていた。
そして、

シュボッ

音を立てて、ライターに火がついた。
やはり、ペットボトルの中身は油――
撫子が考えをめぐらせているその刹那、
男は突然、

“その火に向かってペットボトルの中の液体をかけた”。
瞬間、
「・・・？」
撫子は一瞬目の前で何が起こっているのかわからなかった。
と、いうより、今も理解できていない。
普通、火は消えて、水は地面に流れ落ちるはずである。
が、
撫子の目の前にあったのは、浮かぶ“火”と“水”だった。
それも、双方ともにその形状がおかしい。
火は宇宙空間に放たれた水のように丸くなり、片や水は燃え滾る火のように猛っている。
まるで、火と水を形状だけそっくり移し変えたかのような。

何・・・、これ・・・？

予期せぬ状況に、撫子は驚きを隠せないでいた。
そもそもが、水と火が何も媒介もないまま中空に浮かんでいること事態がおかしい。
ああ、いや、おかしいと言えば前からおかしいのだが。
いや、今はそんな事を考えている余裕はない。
「ぁぁあああッ！」
ザシッ
頭の中の邪念を払うように撫子は叫び、地面を蹴って男に向かっていった。
が、
「――――！」

男はそれをかわした。かわした、というよりは、全力で避けた、と言った感じ。
その男の動きに連動するように、中空の火と水は男について動いている。
そして、
不意に男が右手を撫子の方へ伸ばした。
その瞬間、中空に浮かんでいた水のような火が撫子に向かって飛んできた。
「キャァ！」
撫子はそれを伏せるようにして辛うじて避けた。
そして飛んでいった火はそのまま止まることなく撫子を通り過ぎ、後ろにあった民家の木の上先端に当たった。

パチッ　パチッ

燃えた。
木が。
火が当たったのだから当然だ。

が、

その燃え方は異常だった。
木の先端に当たった火は、まるで水が滴るかのように上から下に“垂れて”いた。
木は火に燃やされる、というよりも“纏わりつかれる”といった感じで、どんどんと消し炭になっていく。
まるで、水を浴びせられたかのよう・・・。
「どうなってるの・・・？」
思わず、撫子は呟いていた。

“何か”が起こっている。

それは、撫子には解っていた。

だが、

ああ、だけど、と、撫子は男を見直る。

もう、退けない。

そう思う。

もう、退く、とか、逃げる、とか、そういう話じゃなくなっている。

撫子はもう一度深呼吸をすると、男に向かって飛び掛っていった。

二章　五話　～滴る火～（後書き）

半年ぶりの次話となってしまいました。
この話を待っていた皆様、本当に長らくお待たせいたしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7095a/

桜と撫子と吸血鬼と十字架と

2010年10月10日02時08分発行